

【埼玉】「目指すは町の保健室」救急病院が在宅医療と訪問リハビリも行う理由-鹿野晃・ふじみの救急病院院長に聞く◆Vol.1

2022年8月26日（金）配信 m3.com地域版

「救急医療に注力しつつも固執はせず、町の保健室のような存在になりたい」——。「ふじみの救急病院」（三芳町）の鹿野晃院長は、理想とする「患者ファーストの医療」を実現しようと救急科だけでなく幅広く標ぼうし、在宅医療や訪問リハビリも行う。救急面では救急車と専属の救急チームを持ち、独自の119番を設けて個人宅や施設にも出動する。ユニークな医療機関の姿を追った。（2022年7月29日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——ふじみの救急病院は救急車と救急チームを保有していると聞きます。まずは救急体制についてお聞かせください。

当院は24時間365日の救急医療に注力する病院であり、民間救急車2台と救急救命士約15人からなる救急チームを保有しています。施設間搬送のために救急車を持つ病院はありますが、当院のように独自に救急専用の電場番号を設けて周知し、個人宅や施設に出動しているところは珍しいのではないのでしょうか。当院の救急チームは消防所属の人たちとほぼ同様の処置を行うことが可能で、各種特定行為も行えます。元消防署の救急隊長だったベテランがおり、若手を育てています。



鹿野晃氏（本人提供）

——重症患者だけでなく、風邪や腹痛など身近な病気・症状も救急科が対応しているそうですね。

当院の救急科は一次から三次まで広く対応していることが特長です。風邪や腹痛、頭痛、腰痛、ケガなどの軽症から吐血や失神、心臓発作、心筋梗塞などの重症までが対象。複数の病気や症状のある方にも対応しており、ついこの前も外傷のある患者さんで精神疾患を抱えており、発熱があって新型コロナウイルス感染症（COVID-19）にかかっている可能性がある、という複雑な方が搬送されてきました。外科、内科、精神科、そして今ではCOVID-19が絡む人に対応する医療機関は少ないため、当院が貢献できる状況も増えてきたように思います。

——軽症まで対応しているのは、ホームページで掲げている病院のテーマ「町の保健室」と関わりそうです。

そうですね。当院は救急科以外にも脳神経外科や循環器内科、消化器内科、整形外科、リハビリテーション科など11の診療科を標ぼうししており、地域のかかりつけ医として機能したい思いもあります。それは、かかりつけ医による診療や啓発を通じた病気の予防が「究極の救急医療」だと考えているためです。

例えば外傷で救急科を受診した患者さんが生活習慣病を抱えていた場合、外傷に大きな問題がなかったとしても、5年後10年後に生活習慣病が悪化して命に危険を及ぼす可能性があります。当院はそれを防ぎたいのです。主訴以外にも慢性疾患はないか、精神的な問題を抱えていないか、介護の状況や相談できる人の有無など社会的な面はどうか——。そういったこともアセスメントし、全人的な医療を提供できるよう心がけています。

合わせて、シームレスな（切れ目のない）医療を提供することも重視しています。当院では外来・入院・リハビリ医療だけではなく、訪問看護ステーションを活用して在宅医療と訪問リハビリも行っています。私を含め、外来を担当する医師が必要に応じて患者さん宅を訪問しているほか、在宅医療を専門とする医師も近く勤務する予定です。スタッフは現在140人ほどおり、医師は常勤換算で30人ほど在籍しています。



ふじみの救急病院の外観

——「救急に注力するかかりつけ病院」を目指していると。なぜこういったコンセプトを掲げ、具体化を図ってきたのでしょうか。

患者さんファーストを考えた末の医療の形がこうでした。例えば患者さんが通院できなくなってしまった場合、在宅医療を行っていないとそこで患者さんとのご縁がぶつんと途切れてしまうことがあります。患者さんとしても医療が遠ざかることで状態がさらに悪化することがあります。だからこそ、在宅医療の必要性は高いのです。

また、患者さんが在宅医療を受けていたとして、在宅医一人だけではマンパワーが足りず医師が疲弊してしまう恐れがあります。夜間に患者さんの状態が悪くなったときは当院が救急車で迎えに行き、初期対応を行う。朝になったら在宅医に説明して今後の相談をする。こんな形にすれば救急と在宅それぞれの関係者の負担を減らすことができ、地域包括ケアシステムの構築にも貢献できるのではないのでしょうか。救急に力を入れつつもそれに固執はせず、「町の保健室」のような広く温かい存在でありたいと考えています。

——先生は青梅市立総合病院の救命救急センターで医長を務めていたそうですね。こうしたキャリアも開業に影響しているのでしょうか。

はい。私は同センターで救急医療の経験を積んだほか、東京都のクリニックで在宅医療を経験し、別の精神科病院では内科の診療部長として内科診療に携わりつつ、精神疾患も診ていました。こうしたキャリアが「シームレスな医療を提供したい」という開業医としての考えや医療機関の構想に影響していると思います。



ふじみの救急病院が保有する救急車

◆鹿野 晃 (かの・あきら) 氏

2002年藤田医科大学卒。青梅市立総合病院救命救急センターや在宅クリニック、精神科病院などを経て、2018年に「ふじみの救急クリニック」を開院。COVID-19への対応を機に増床し、2020年に「ふじみの救急病院」としてリニューアルオープンした。

【取材・文・撮影（顔写真除く）＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

